

第3章 近年の変質

第1節 変質の概要

周辺の雑木林のほとんどが姿を消すか荒廃が進む中、平林寺境内林も少なからず変化があった。天然記念物指定以降、境内林に生じた質的变化（変質）を下表にまとめた。この変質は景観の変化をもたらせた。生物相にも変化が認められ、林の変質との因果関係は明確ではないが、管理の在り方が大きく影響していると考えられる。

変質の原因として人手不足による管理不足など各種の要因が挙げられるが、確固とした管理方針に基づいた管理システムの欠如の影響も大きいと考えられる。また、目標植生や管理体制についての関係者間での情報の共有や議論が不十分であったことも否めない。今回の議論、計画策定の意義はここにある。

表 3-1 落葉広葉樹林の変質

	項目	影響
1	放置（手入れ不足）による変質 ・高木化、枯木放置 ・常緑樹・低層木、ササ類の繁茂 ・落葉堆積	景観の変化、林床植生の貧化 (生育不良)
2	特定種の植栽（イロハモミジ、ツツジ類） ・モミジの日照を確保するためのコナラ、クヌギ、ホオノキなどの伐採	風情の変質、林床の陰化、林床植生の貧化

備考：これまで雑木林の本来種とされていた草本類が次第に勢力を失いつつある。また、既に消滅した種もある。

表 3-2 その他の区域

	項目	影響
1	マツ枯れ ・松くい虫（マツノザイセンチュウ）被害 ・スギ、ヒノキの補植	景観変化、林床植生の貧化
2	僧堂周辺の針葉樹林（スギ、ヒノキ）枯損、心腐れ、溝腐れ	景観変化
3	通路の拡幅、舗装、転圧（3～5m幅の道路が境内を一巡）*	通路部分の圧密、無生物化（林縁植物の後退、貧化）

*保安・防災上の理由

第2節 変質の状況

上記の植生の変質の具体的な状況は、次のとおりである。

(1) 落葉広葉樹林

以前行われていた萌芽更新がほとんど行われなかったため遷移が進行した。二次林

である雑木林を放置して遷移を進行させ、極相に近づけることによって、鳥類の良好な生息環境を確保する、という考えもあったようである。

このため、遷移の進行による大径木化や、それに伴う樹幹淘汰が進行している。構成樹の高木化で冠雪害や強風による上部の枝の折損が目立つようになった。また、根株腐朽被害木や被圧木の倒伏が近年目立つようになった。さらに、陰樹の侵入が目立つほか、林床はアズマネザサ、クマザサ、小低木で覆われた区域が大半を占めるようになり、林床植生の貧化を招いている。



図 3-1-1 毎年下刈り・クズ掃きが行われている区域 (下山大門通り沿い) 図 3-1-2 手入れ不足の影響が著しい区域 (下山南東部)
現状の落葉広葉樹林 (平成 26 年 3 月撮影)

(2) モミジ (カエデ類) の植栽

「イロハモミジは新座市の木でもあり、美しい。」との理由でモミジの植栽が続けられた結果、今では平林寺が紅葉の名所としての名声が定着した。しかし、モミジが増えれば増えるほど武蔵野の情感は失われる。

元々は、伽藍周辺、平林寺大門通り及び陣屋通りの敷地境界に沿って散在していたに過ぎなかったが、平成10年(1998)頃からモミジの植栽が積極的に進められ、モミジ山と称される上野高校敷地跡を中心とした上山一帯、散策路沿いはモミジで埋め尽くされるような状況になっている。このままでは、木の成長に伴い、今後このような傾向がより強まるものと考えられる。長い目で見れば、秋の情景としての平地の落葉広葉樹の黄葉は稀少性が今後一層高まるものと考えられる(平地の落葉広葉樹林の更なる減少は不可避であり、平林寺の林は大きな潜在的価値を持っている)。

備考1:ここでは「モミジ」を寺域に見られるカエデ科の総称として用いている。寺域ではその多くをイロハモミジが占めている。本種はイロハカエデとも言い、山地の日当たりの良い、やや湿気のある沢沿いや斜面に自生するとされる。

備考2:昭和52年(1977)に制定された新座市の木はモミジである。制定理由は次のとおりであるが、当時平林寺境内のモミジが、市民が誇りとするほど多く植栽されていたのか甚だ疑問である。

『モミジは市内に多くみられ、四季を通じて豊かな趣をそえており、古くは平林寺の参道や川越街道にトンネル状をなしていました。また、かつての国定教科書の「野火止用水」の中にも記載がみられます。特に平林寺境内のモミジは市民の誇りとして愛着を集めています。庭木としても親しまれ、緑化推進にも役立つなどから市の木に決めました。』

備考3:原色に近い広大なモノトーンの植栽は近年の流行(各地の芝桜、コスモス、ヒガンバナ等々)で、これらを「美しい自然」と見る向きもあるが、日本の伝統的な審美感とは相容れ

ないものがある。生物多様性も極めて低い。

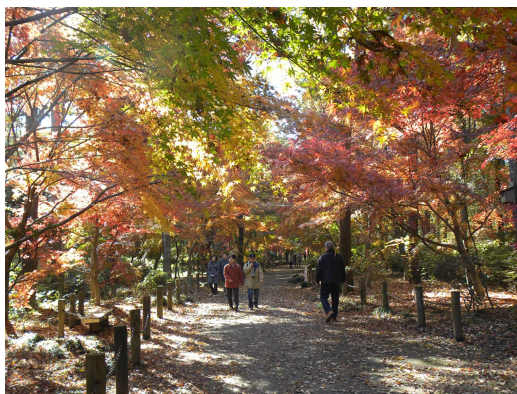


図 3-2 近年のモミジの植栽（上山散策路沿い）

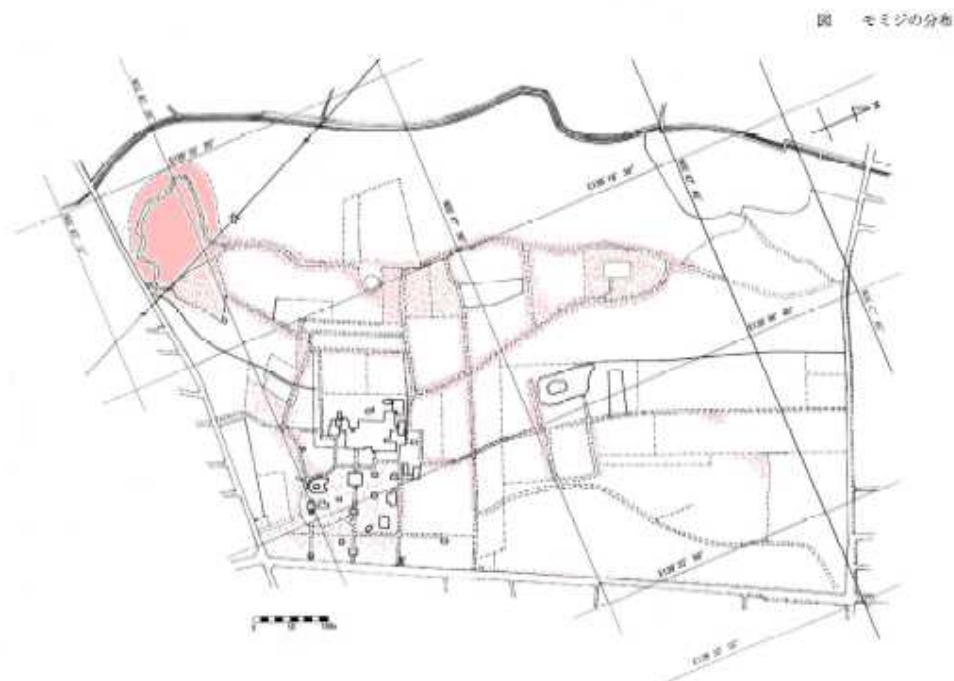


図 3-3 モミジの分布

(3) スギ、ヒノキ林

昭和30年代に亜硫酸ガス、光化学スモッグなどの大気汚染等が原因だとして、首都圏近郊のスギ、モミなどが枯死する現象が問題になったが、その原因については結局明らかにならなかった。^{9) 10)} 昭和49～53年頃、平林寺においてもスギ、ヒノキの老齢樹林が4～5年のうちに先端枯れを起こし(図3-4-2)、当初大気汚染によるものと考えられていたが、半僧坊前のヒノキ林の急速な集団古損が昭和40年代後半に起きたが、その原因は踏圧¹¹⁾あるいは地下水低下によるものとの報告がある。

スギ、ヒノキの林が伽藍を取り巻くように配置されているが、樹齢もまちまちで、明らかに補植と見られる若い株が老齢樹に混ざっている区域も多い。一部の区域を除

いて、多くが溝腐れや根株腐朽病の被害を受けている。^{12) 13) 14)} 原因として、罹病苗の植栽や枝打ち不良などの管理上の問題^{15) 16)} や排水不良地への植栽などの立地条件も関係しているものと考えられる。平野部のスギ林等の集団枯損は水ストレスの影響が大きいと指摘されている。^{17) 18) 19)} また、安全確保のための緊急伐採等を適切に行う必要がある一方で、本堂裏等の老齢スギ林の間伐は景観維持の面や、水ストレス関連から慎重な対応^{20) 21)} が求められる。

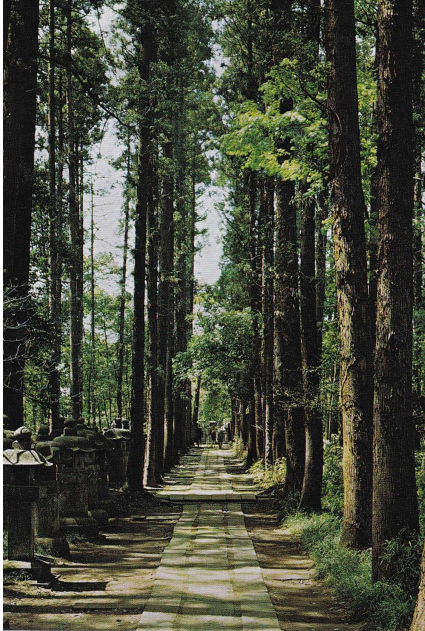


図 3-4-1 大河内松平家廟所参道のスギ林 図 3-4-2 半僧坊前から南門のスギ、ヒノキ林
 (昭和 40 年平林禅寺絵葉書) (昭和 49 年 2 月・福田知明氏撮影)
 平林寺のスギ、ヒノキ林



図 3-5 現状のスギ、ヒノキ林 (平成 26 年 3 月撮影)

(4) アカマツ林

建築用材や燃料として用いられてきたアカマツは、コナラやクヌギと同様、武蔵野を代表する樹種であった。現在、アカマツの分布は野火止塚周辺から業平塚にかけての疎林と松平家墓所裏の辺りに限定されたものとなっているが、天然記念物指定当時、コナラ、クヌギ林の上層木としてほぼ全域に分布していた。しかしながら、昭和 40 年代から始まり、昭和 60 年代に再び被害が拡大したマツ材線虫病により、実に何百本もの老齢樹が順次枯死し始め、僅かばかりの老齢樹と後日の補植株のみとなったの

が今の姿である。

防除薬剤注入にもかかわらず松枯れは今も続いている。また、マツ材線虫病による枯損後の補植木の管理が不十分であったことから一部‘荒れた’様相となっている。



図 3-6 かつての武蔵野のアカマツ林²²⁾

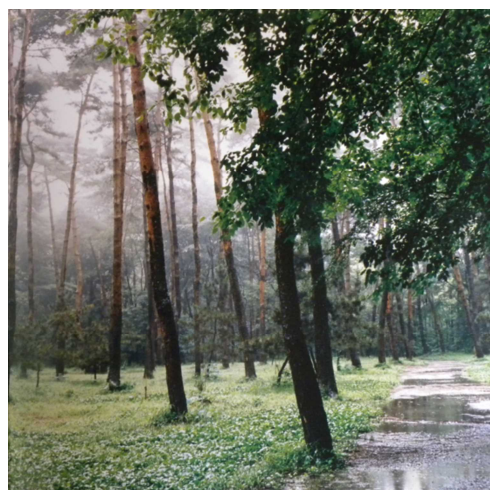


図 3-7-1 業平塚付近から野火止塚のアカマツ林 図 3-7-2 枯死しかかったアカマツ林²³⁾
(昭和 49 年頃・福田知明氏撮影)

平林寺のアカマツ林



図 3-8 現状のアカマツ林 (平成 26 年 3 月撮影)